九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

黄英著『宮沢賢治のユートピア志向ーその生成、崩壊と再構築ー』

賴，怡真
九州大学大学院比較社会文化学府修士課程

https://doi.org/10.15017/17831

出版情報：九大日文. 14, pp.89-92, 2009-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎書評

黄英著『宮沢賢治のユートピア志向―その生成、崩壊と再構築―』

賴　怡真（Yi-chen）

目次

はじめに　ユートピアの生成――彼方への視線
第一章　ディストピアの様相――「蜘蛛となめくぢと狸」
第二章　現実批判の様相――大正一三年までを中心に――
第三章　楽園の崩壊――「黄いろのトマト」
第四章　ユートピア再構築への出発
第五章　現実世界におけるユートピアの再構築――「ポラーノの広場」――
第六章
結び
あとがき

本書は主に時間の流れに沿って六章を設け、賢治文学におけるユートピア志向の生成、崩壊、再構築という変化の過程をたどっている。著者は大正一三（一九二四）年に書かれた「黄いろのトマト」にとくに注目する。この作品は賢治文学においてあるターニングポイントを占めていると指摘する。そこで、大正一三年以前の作品を前期とし、第一章から第四章までは前期作品の分析を通して、おもにユートピアの生成、それと並行している現実批判、また、破壊に至るまでの過程を整理する。そして、大正一三年以降の作品を後期とし、第五章と第六章では、賢治が如何に新しい理想世界を再構築したかを追究する。以下、各章を詳しく見ていく。

第一章は、賢治文学の初期（生成段階）に描かれているユートピアでは心の問題が重視されていると指摘する。そして、心から喜ぶかどうかが幸福の判断基準であり、人間性の内面を重視する姿勢は、賢治の当時の宗教心（華経教信仰）と深く関わっているという見解を示した。また、賢治の所謂ユートピアの世界が空間的に遥かに離れた彼方にありつつも、他の世界の者の憧れの対象でもあり、心理的な意味では両者は繋がっているのではないかという点が初期作品「双子の星」「『旅人のはなし』から」からの描写によって検証される。また、そのユートピアの世界には、王様が存在しており、その絶対的な権威の施した浄化作用が重要な役割を果たしていると、賢治のユートピアの世界のあり方を明らかにした。

本書はまた、川端香男里の言葉を引用し、「批判を口にする時、そこには必ず何らかの良いと思われる参照物が存在する」（一九四頁）と述べるように、賢治文学の中に、ユートピアの世界が描かれている一方、ディストピアの描写も並行して存在することを指摘した。その例として「蜘蛛となめくぢと狸」が取り上げら

れ、第二章は、賢治のディストピアの世界の分析を行った。従来、この作品は小沢俊郎、万田務、川島裕子らの論で、この作品の背景にある「競争」への批判や「飢餓」を巡る生存問題など、主に「競争」という観点から論じられてきた。しかし、その「競争」の性質の変化が見落とされたと本章で指摘している。「蜘蛛となめくぢと狸」の話の後半に、既に死活問題に関わる生存競争から、嫉妬や見栄による無制限に拡大する欲望の競争へと「競争」に関する質の変化をとらえる。ここではまた、賢治が後年に改作した「寓話 洞熊学校を卒業した三人」との比較を行い、同作がより調和的であり、共生の生活様式を理想的なものとして提示した。そして、前作にはない「学校」という設定の加筆によって、競争原理はもはや個人レベルを超えて、個人的欲望と社会原理が共振することで、より社会性が目立つようになったと論じた。前者はディストピアの性格が強く打ち出されたのに対して後者は「生」の可能性が示されるユートピアの世界の存在を垣間見せてくれた。

そして、第三章は大正一三年までを中心に引き続き、賢治文学の現実批判の様相を解剖する。まず、同じく狐をめぐる三作「とっこべとら子」「雪渡り」「茨海小学校」を取り上げ、狐世界の通常の考え方が人間の従来抱いている価値観とはすべてが正反対で表現される点に、賢治の現実批判が描かれていることを指摘した。しかしそうした全てを裏返せばいいという賢治の現実批判は短絡的な性格を持っているという点も鋭く突く。賢治文学の現実批判のものには、前述のように、倒錯の視点からによる批判もあれば、直接的な批判を加えたものもある。その例として「二人の役人」と「カイロ団長」が取り上げている。前者は、子供の視点から人間の作り出した滑稽で理不尽な官僚世界を批判し、後者は、借金返済の原理とそれをバックアップする社会体制の二つの要素が見られる資本主義的経済制度を暴く。その一方、王様という権威者の出現によって借金の連鎖から抜け出せない「あまがえる」を救ったという他力本願（つまり他者によって成り立つ調和の世界）による問題解決法は、初期作品「双子の星」から同様の傾向が見られると指摘した。

本書は賢治文学を前期と後期に区切りをつけた作品として「黄いろのトマト」を取り上げる。第四章では、この作品から見られる賢治の楽園が崩壊する過程の分析がなされている。この章では興味深い論点がいくつも繰り広げられ、賢治の西洋志向も垣間見せてくれた一章でもある。自給自足の農耕生活を営んでいる兄妹の暮しは一見原始的に見えるが、ところどころハイカラな生活ぶりも見せる。作品の中に出てくる兄妹二人の赤ガラスの家や、黄色のガラスの納屋、働く場の赤ガラスの水車など、時代背景を検証してみれば、ガラスの製造技術は明治末期頃に伝来し、大正になっても技術はまだ幼稚なものであり、生産も少量のため、ほとんど欧米からの輸入に頼っていた。大正末期に書かれたこの作品は、時代を先取りしたような作品と言えよう。また、兄妹が栽培しているキャベツとトマトも当時には西洋野菜の域を出ず、珍しがられたものである。このように、幼い兄妹の生活している楽園（ユートピア）は原始と現代の両方のイ

メージが入り混じった世界であることが明らかにされた。そのほかに、兄妹を楽園から連れ出したサーカスの誘惑についての検証も丁寧である。当時は、サーカスの伴奏音楽からはじまり、華麗な衣裳、布で隠された巨大動物などは、観客を引き付けるための装置として重要な役割を果たしていた。また、サーカス団にまつわる悪い噂の心理も分析し、「噂の流布量は当事者に対する問題の重要さと、その論題についての証拠のあいまいさとの積に比例している」（七六頁）という川上善郎の論説を引用し、サーカスの発信した華麗なパフォーマンスが観客に非日常性の体験を与え、そういう開放的、日常的な時空間を求める観客にとって、サーカスがその願望を与えてくれる好材料であることが指摘された。よくない噂（作品中で取り上げられたサーカス団による子供攫いや、残忍な芸の仕込み方など）も悪の魅力として人々の関心を呼び、サーカスの人気を上昇させる巧みなトリックとして意味づけた。また、兄妹の栽培している黄いろのトマトの「黄い色」にも注目し、賢治のいわゆる二つの黄金の定義を明かにした。大塚常樹の論文を引用して指摘したように、賢治の黄金には、資本主義的な「お金」と、仏様の身体の色に使われる聖なる黄金（古金）の二つあるが、この作品の黄色のトマトが意味した黄金は仏様を象徴するものではなく、光り輝く自然物としての黄金で、貨幣にされる前段階の黄金であると指摘する。このように、原始風でかつ現代風に暮らしている兄妹の生活ぶりや、サーカスにまつわる様々な検証、賢治の二つの黄金の定義などの解明により、「黄いろのトマト」を解読する際のより広い視点が提示された。また、兄妹が楽園を出て初めて体験した様々の差異――子供と大人の差異や自給自足的な文化と貨幣商品的な文化との差異など――はもともと存在するものであり、それまで外の世界と接触しなかったため、差異が顕在化されなかっただけだと、「差異」の質をも指摘した。

第四章で楽園の崩壊に至るまでの過程を詳しく分析したあと、第五章と第六章において、新しいユートピアの再構築の過程に関して考察している。初期作品に見られる現実世界と遠く離れた天上世界は賢治文学のユートピア概念の起点であると言えよう。しかしその後、楽園の構築と共にディストピアの世界が並行して描かれるようになった。その過程では、「黄いろのトマト」で描かれたように、醜悪な現実社会と触れることによって楽園がいったん崩壊し、新しい楽園の再建が要請される。賢治の新しい世界への意気込みは、大正一三年から昭和二年にかけての作品群に随所で見られる。その中に賢治の内心にまつわる葛藤も同時に見られる。童話「龍と詩人」の中に言われた「明日の世界」や「業の花びら」異稿や詩「一〇五六番〔サキノハカといふ黒い花といっしょに〕」、詩「生徒諸君に寄せる」には、新しい世界への希求や、革命のメッセージが見え隠れしている。その背後には深い悲しみや不安があり、ある種の矛盾した状態を見せていると指摘した。そしてこの頃の作品は初期と違い、遠く離れた天上世界より、地上の現実世界に理想世界を求める「現実への帰還」という傾向が出てきている。大正一三年に描かれた「ひかりの素足」にその兆しが見られる。「ひかりの素足」に

出てくる「峠」という場所は主人公の一郎に試練と希望を与え、一郎の成功を促す装置として機能する。このようにいっそう強くなった一郎が現実世界に戻ることは説明のできない運命であり、こういう現実に帰還しなければならない運命は「銀河鉄道の夜」のジョバンニの行方についても言えることである。最後に、「ひかりの素足」の一郎はまだ「本当の道を探す」段階にあると指摘し、第五章を締めくくった。

第六章は、「ポラーノの広場」を取り上げ、まず「ポラーノの広場」に先行する作品群との比較を行った。作品群の変遷は、賢治の建設しようとする新しい広場（ユートピア）が昔話に存在する空想の場であり、悪役の山猫博士のより具体的な描写によって俗化され、現実的な場へと変貌していく過程を示す。そういう広場には、いったん崩壊の過程を経てまた新しい理想の広場へと再構築された変転の軌跡が見られる。第六章の後半は、賢治の求めているユートピアが同時代の武者小路実篤の「新しき村」とはどう異なるのかについて両者の比較をする。前述した「ポラーノの広場」の時代背景は激動の時代といわれる大正期であり、「物事に、より敏感な神経をもっている作家たちがさまざまな姿勢で、社会変動に対処してい」（一八六頁）た。賢治にしろ、実篤にしろ、彼らのユートピア志向と実践活動はその時代の産物の一つであるといい、また二人の理念の異同も比較されている。二人とも「個」と「全体」の調和を志向しているが、その全体との調和するスケールの差異があり、実篤は「人類、自然の意思」という個人の集合体にとどまっているのに対し、賢治はもっと次元の高い「宇宙の意思」という全てのものを内包する宇宙への調和を願っていた。また、禁欲主義者の賢治は、人類の本能を厳しく否定し、自己の中の本能を全て肯定する実篤の姿勢とは異なる。その姿勢には賢治の宗教的なものの見方も読み取れる。しかし賢治のユートピアの追求は晩年において意識の変遷が見られ、「ポラーノの広場」に「産業組合」というくだりを加筆し、作品により現実的な要素を取り入れた。それは賢治の羅須地人の実践活動において味わった挫折や、晩年における病床生活によって現実世界に目を向けられなかった自己への反省ではないかと、切ない余韻に満ちたなかで、本書の最後を締めくくった。

賢治文学において、ユートピアの追求は永遠のテーマであり、賢治はそれを「イーハトーブ」という独自の造語によって表現し、数多くの作品の舞台として使われている。それは、理想の楽園として描かれるものもあれば、鋭い風刺のこめたディストピアのものもある。本書は賢治のユートピア志向に関心を向け、大正一三年を境にし、賢治文学を前期、後期に区切り、賢治のユートピアの生成、崩壊と再構築の道程を論証した。そういう道程は一直線のものではなく、新しい世界に対する葛藤や不安も入り混じっていることを綿密なテキスト分析を通して浮き彫りにしている。賢治のユートピア志向を理解するために役立つ一冊である。

（二〇〇九年二月二十日　花書院　二〇九頁　一三八〇円＋税）

（九州大学大学院比較社会文化学府修士課程一年）